

はらいがわ 祓川の渡し

祓川は別名「多気川」^{たけがわ}、「稲木川」^{いなぎがわ}などとも呼ばれていました。江戸時代には現在のような頑丈な橋はなく、夏場の水量が多い時は渡し船、冬場の水量が少ない時は船の上に仮の板橋をかけて渡っていました。

江戸時代、紀州和歌山藩では、金剛坂村に渡しの管理をさせ、旅人が川を渡る時に料金を取っていました。

元禄15年(1701)の史料(『勢国見聞集』)からは、細かな料金が分かります。

常水時 1人:1文 乗掛^{のりかけ}:3文

中水時 1人:3文 乗掛:9文

大水時 1人:6文 乗掛:18文

(*乗掛:人1人が馬に乗り荷物ものせた状態)

金剛坂村の庄屋だった森島家には舟渡しの史料が残されていて、寛保元年(1741)から天明5年(1785)の45年間に1,049両も料金を徴収したことが分かります。その後も、史料からは年間およそ20両弱の徴収があったようです。

『伊勢参宮名所図会』には、船と板が連結された仮の橋を旅人が歩いている姿
『伊勢参宮名所図会』に描かれた祓川
や、橋の手前で料金を取っている様子が見られます。

祓川では、大雨後に無理に川を渡ろうとして大勢の人が亡くなった話も伝わっています。(みんなの資料も読んでみてね) 現在のコンクリート製の頑丈な祓川橋は昭和41年(1966)にできたもので、今では簡単に渡ることができます。しかし、江戸時代の旅は現代のようにいつも安全に渡れたわけではなく、危険とも隣り合わせだったのです。

(*1両:約4万円、1文:約10円~30円くらい)



キーワード：伊勢街道、竹川、金剛坂、祓川、渡し